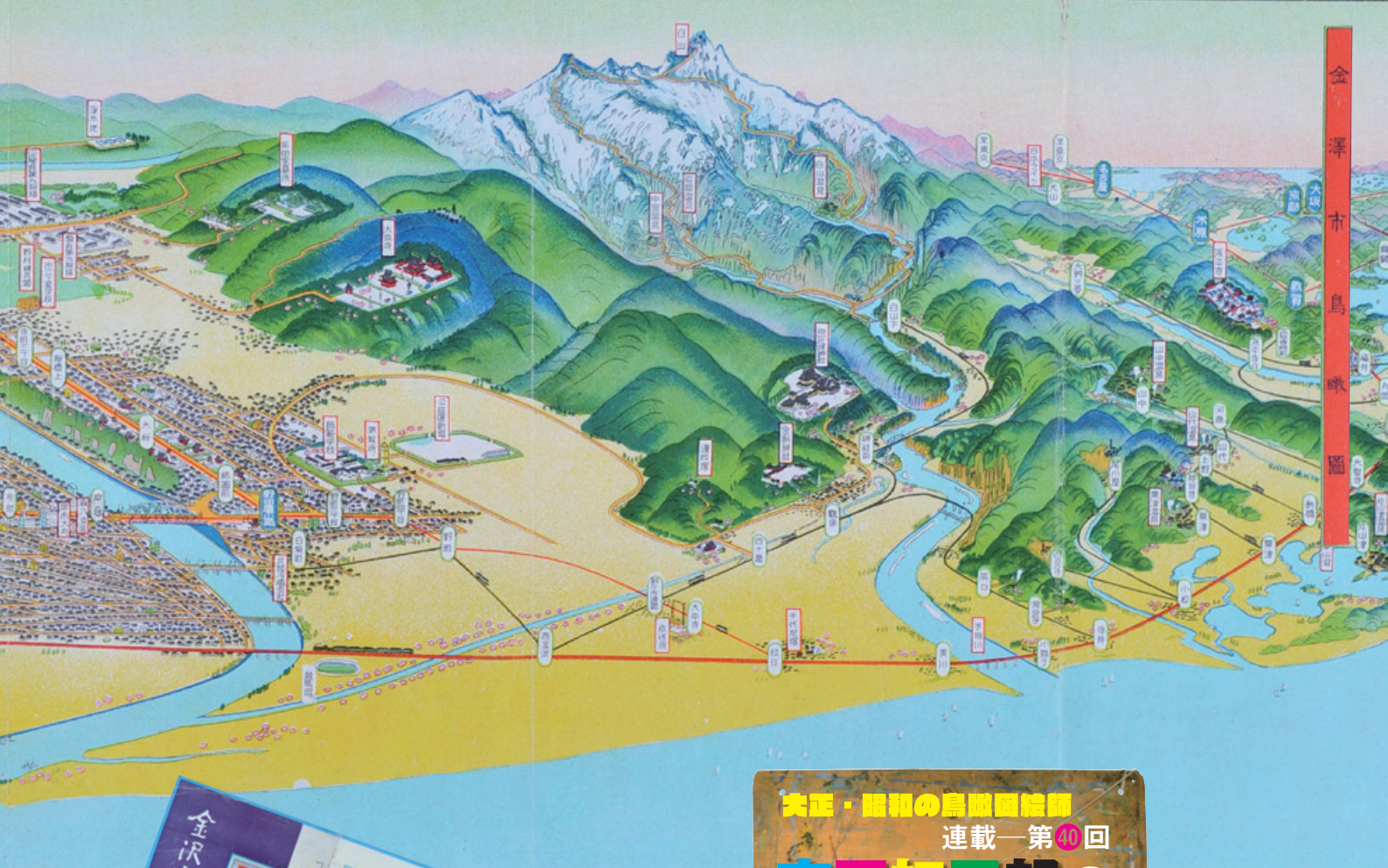




金沢市

金沢市鳥瞰図

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

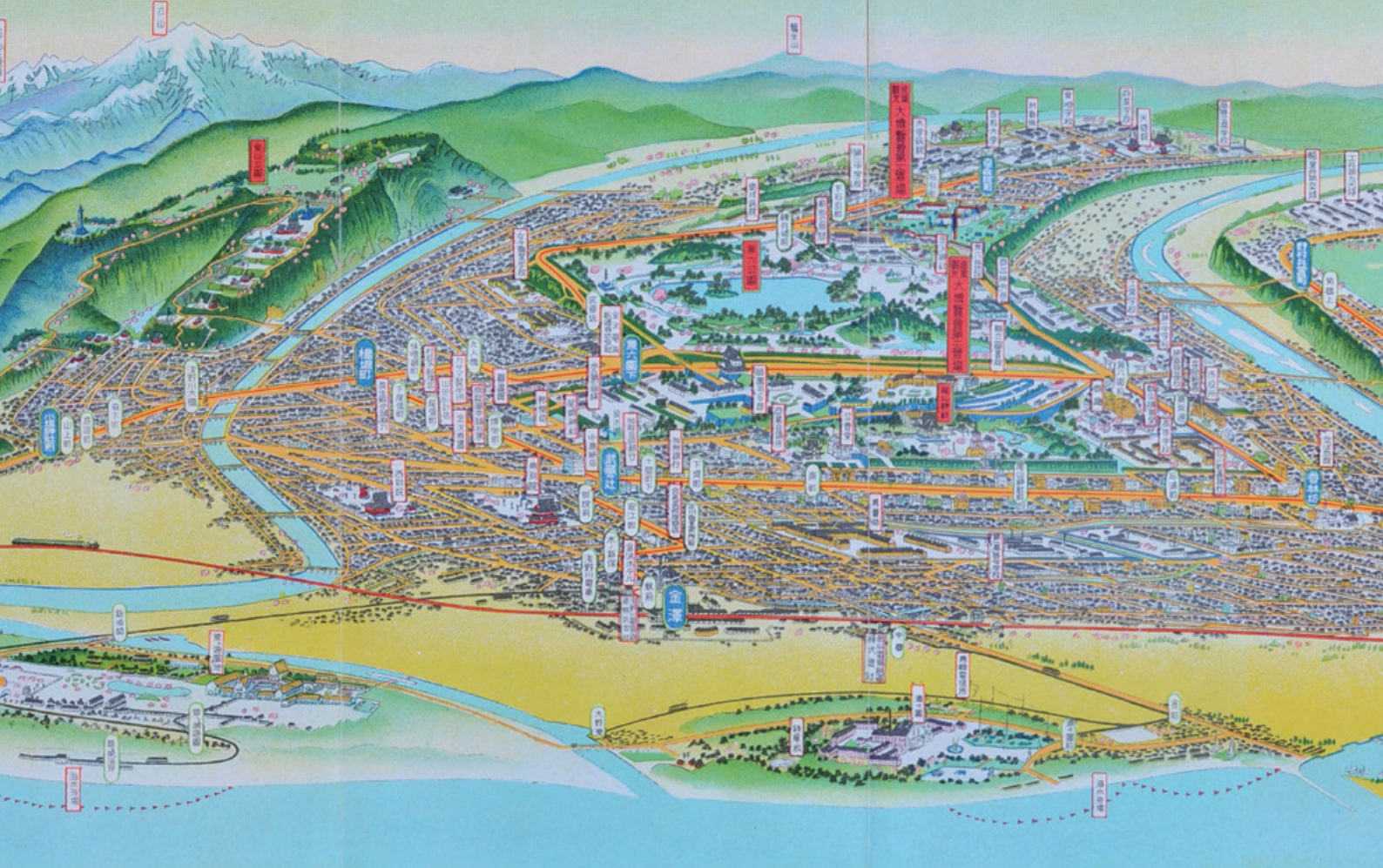
金沢市に本社を置く北陸鉄道は、北鉄と略称されて親しまれている。現在は石川県内を中心として鉄道とバスを運営する中小民鉄である。

大正八年開業の金沢電気軌道などを前身として、昭和十六年に合併し北陸合同電気に改称。翌年には同電気の鉄道・軌道事業を旧北陸鉄道に譲渡した。さらに同十八年には、戦時下の陸運統制令によって、旧北陸鉄道、能登鉄道、金名鉄道（大正十五年開業）、金石電気鉄道、温泉電気軌道（大正三年開業）ほかの大合併により（鉱石輸送の尾小屋鉄道は除く）、北陸鉄道が新設された。

戦争末期の昭和二十年七月には、小松電気鉄道（昭和四年開業）を合併。同年十月には浅野川電気鉄道（大正十四年開業）を合併し、尾小屋鉄道を除く石川県下の中小民鉄とバス会社の全てが統合されたのだった。その意味で、昭和七年春作図の本図は、大合併前の状況が、民鉄は黒

藤本一美

首都大学東京・専修大学非常勤講師。地図情報センター理事。日本地図学会会員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に『旅と風景と地図の科学Ⅱ』（私家版 2006 年）、最新刊に『展望の山 50 選 関東編』（東京新聞出版局）がある。



北陸鉄道株式会社 HOKURIKU RAILROAD Co., Ltd

設立：昭和18年10月13日
本社：金沢市割出町556番地

長い歴史を持つ二つの路線。 地域の足として、観光路線として、 走り続ける。

金沢市の中心部から南へ伸びる「石川線」と、金沢駅から日本海へと向かう「浅野川線」の二つの路線を運行している。石川線は全17駅、13.8km、浅野川線は全12駅、6.8kmの路線で、平成27年には石川線が開業100周年、浅野川線が開業90周年を迎えた。長い歴史の中で一部路線の廃止など厳しい状況乗り越えてきた北陸鉄道だが、昭和18年に設立する以前から運行する両路線は、現在も変わることなく身近な生活の足として地域住民に愛されている。平成27年3月には、石川線に、会社が設立して以来初めてとなる新駅「陽羽里駅」も開業した。また、北陸新幹線の開業以降、金沢を訪れる観光客が急増しており、北陸鉄道では「1日フリー乗車券」の発売やイベント電車の運行など、観光利用のサービス向上と沿線の観光振興についても積極的に取り組んでいる。



『金沢市「金沢市鳥瞰図」』

(昭和7(1932)年春発行)
金沢市役所 発行
他に産業と観光の大博覧会発行の2種
犬山の日本ライン 蘇江 観光社 印刷

富士山↓



の実線で、金沢市内軌道線(昭和四十二年全面廃止)は赤の細い実線、当時の国鉄は赤の太い実線で図示されていて、複雑な鉄道史の判読の助けになっている。

昭和四十年代に入ってから、モータリゼーションの進展や高速化の影響で鉄道部門は縮小傾向で、北陸鉄道加南線と総称で呼ばれ、温泉地を結ぶ山中・片山津・粟津・動橋などの各線は昭和四十六年までにほぼ全廃され、現在は二路線二〇・六kmを有する石川線(野町駅―鶴来駅〔白山市〕)と浅野川線(北鉄金沢駅―内灘駅)のみとなっている。

特異の大胆な構図は、日本海側上空から俯瞰する雄大なもので、左は能登半島と北アルプスを、右に白山連峰を入れ、中央部には巨大な金沢市街地(観光案内図)を配置。南西を流れる犀川と北東の浅野川とに挟まれて小立野台地(河岸段丘地形の典型)の中心部に、日本三名園の一つ、大名庭園の兼六園や加賀藩前田家の金沢城跡(公園、後に金沢大学は郊外へ移転)を利用して博覧会会場となったことが分かる。富士山も出没していて、びつくり仰天だ。

表紙は金沢八勝と前田利家公、百万石の偉人を披露している。